

手元供養 遺骨を側に保管し 故人を身近に感じる

山崎譲二さんが手元供養品を製作・販売する博國屋を設立したのは二〇〇二年のことだ。父が病気で余命一年しかないと知って、どう供養すれば本当に喜んでもらえるのか悩み抜いたすえに、手元供養に行き着いたのだ。

手元供養とは、遺骨を自宅などで保管する新たな供養のスタイルとして、最近、とみに注目を集めている。保管方法は、大型の納骨容器に取めて持ち運ばないものから、持ち運び可能な小型のものま

でさまざま。ペンダントに入れて肌身離さずにいることも可能だ。

遺骨自体を加工するやり方もある。プレートやペンダントそのものにしたたり、特殊な技術で人工ダイヤモンドを作るものもある。

た だが、デザインや素材で山崎さんが満足できるものはない、そもそも手元供養という言葉すらなかった。

それならば自ら商品開発を手がけよう。街づくりのプランナーだった山崎さんが、まったく畑違いの世界に飛び込んで会社まで興し、手元供養という名前も付けた。〇五年には山崎さんは同様の考えを持つ仲間とNPO「手元供養協会」を設立、全国で手元供養

に関するセミナーなどを開催し、これまでに延べ三〇〇〇人が来場した。

「仏壇や遺灰より故人をいつまでも身近に感じることができ」「持ち歩くことができいつも一緒にいられる」。手元供養品を購入した遺族から寄せられた声である。遺族は、故人を偲び、故人に感謝することで心を癒やされて、元気を取り戻すという。

手元供養の多くは、遺骨の一部を手元に置くケースが目立つものの、将来的には墓の代用品として広がっていく可能性もある。これまで見てきたように現代人にとって墓を建てるのは、経済的にも心理的にも大きな負担になっている

からだ。少子化のなかで将来、誰が墓の面倒を見てくれるのかといった不安感は強まるばかりだろう。「継承を前提としたこれまでの家墓制度は明らかに限界にきている。エコロジーなど大義名分が立つ理屈づけができるなら、現代人はそれほどこだわらない。早晩、今の制度は音を立てて崩れるのではないか」。山崎さんはこんな見立てをしている。



写真上：清水焼の「おもいで碑 地藏」(中央、7万円)。納骨容器は真ちゅう製／写真中：紫檀、ケヤキでできた「お守りペンダント・壺シリーズ「葉Shiori」」(右下、3万0450円)／写真下：真ちゅう製の「ミニ骨壺なごみシリーズ」(各1万9800円)。いずれも問い合わせは博國屋

身近にあれば安心感高まる

主な手元供養品メーカー一覧表

会社名	連絡先	手元供養品の特徴
エターナルジャパン	03-3846-4380	遺灰で作るファインセラミック
アルゴダンザ・ジャパン	0120-253-940	遺灰から作製するダイヤモンド
方丈	0120-816-940	納骨ペンダント、ミニ骨壺など
博國屋	075-315-3370	清水焼オブジェ、ペンダントなど
佐々木木工	0847-52-3535	手元供養品に合う仏壇
五峰産業	087-871-3010	庵治石で作ったオブジェ

*「手元供養のすすめ」(山崎譲二著、祥伝社新書)を参考に本誌編集部作成